

## 34. ICT (情報通信技術) を利用した本学の教育環境に関する考察

獨協医科大学基本医学 情報教育部門/情報基盤センター

上西秀和, 山下真幸, 坂田信裕

近年, 本学の教育において, ICT (情報通信技術) を積極的に活用した取り組みが多数行われている。今回, 現状の ICT 環境の利用状況について調査し, その結果を今後の教育環境構築に役立てることを目的とした。

今回, コンピューター教室, 学術系無線 LAN, LMS (学習・授業支援システムの3項目について調査した。

コンピューター教室環境の改善を行い, 2012年度から最大206名までがコンピューターの同時利用を可能とした。しかし, 現状までの利用実績は, 過去2年間の実績と比較して, 大きな増減が認められておらず, より多くの授業で活用可能な教育環境であることを周知していく必要があると考えられた。

また, 学生のコンピューターへのログイン数から, 学生の利用状況を分析することができた。とくに医学部5年生の開放時の利用が多く, BSLの合間等において利用していることが考えられた。

本学の学術系無線 LAN 環境である DARWiN は, 運用開始以来, 利用者数が増加し, 2012年9月時点で, 学生全体の約1/3が利用していることが分かった。また, 日々の利用者数の累積を月ごとに集計した結果から, 昨年に比べ, 2012年度では3倍近い利用者数の増加を示している月もあった。この結果から, 学生による DARWiN 利用が拡大していることを把握できた。

LMS (学習管理・支援システム) 利用は, 運用を開始した昨年に比べ, 2012年度ではログイン数の大幅な増加が認められた。また, 利用授業科目数も増加しており, 徐々に普及し始めていることを示す結果と考えられた。また, LMS 利用に対するアンケート結果 (医学部1年生) から, LMS を肯定的にとらえている学生が多いことが分かった。

今回の調査から, 本学の ICT 活用教育環境は幅広く利用され, とくに無線 LAN 環境や LMS では, 利用増加状況を具体的に確認できた。これらの結果は, 今後の教育環境整備に役立つ結果と考えられた。

## 36. 解剖実習で見つかった大腸ポリープについて

獨協医科大学医学部2年

三宅勇輝, 藤原 碧, 渡邊理彩

【目的】本年度, 解剖実習のご遺体から結腸ポリープが見られたので, 実習 PBL を行った。また病理所見をとりポリープの種類及び悪性化の有無を診断し, 死因である肺癌との関連について考察を行った。

【方法】ご遺体の結腸部から病変部を採取し, ホルマリン再固定の後パラフィン切片を作成した。後に HE 染色にて病理学的に観察を行った。標本作製は, 法医学教室に御協力頂き, 病理診断は病理学の本間准教授, 臨床考察は第一外科の山口准教授のご指導を受けた。

【結果】今回の症例においてはポリープに悪性化の所見は認められず, 良性腺管絨毛腺腫であった。したがって転移などの可能性は無く, 死因である肺癌とは関連がないものと思われる。

【考察・結論】今回の症例における大腸ポリープは良性腺管絨毛腺腫であった。過去のデータから推測すると, 本症例と同等の大きさのポリープにおいては約53%に悪性化の所見が見られる事がわかった。仮にポリープに悪性化の所見が見られた場合は, 血行性またはリンパ行性の転移が見られる可能性があり, 肺に転移することも考えられる。